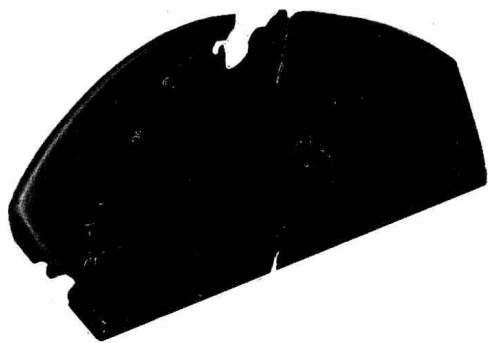


折れた櫛

斎藤 澪



折れた櫛



斎藤
滯

折れた櫛

定価 二二〇〇円

昭和六十三年四月十五日初版印刷
昭和六十三年四月二十五日初版発行

著 者 斎藤 濯

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 文勇堂製本

発行所 中央公論社

〒104

東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

◎一九八八 検印廃止

ISBN4-12-001668-4

目次

折れた櫛

5

待っていた女

45

夏のこはぜ

89

鈴の音

131

火傷

155

呪いの木

195

しびと花

225

装
幀
深
津
真
也

折れた櫛

折れた櫛

金井桐子から電話がかかってきたのは、朝もかなり早い時刻だ。

「今日は水道橋までお出かけの日でございましょう？」

語尾に関西訛りの残る、そのはんなりした口調と声は、とても六十すぎとは思えない。

金井桐子はいった。

「ほんとうはそちらに伺えるとうろしいんですけれど……」

できれば午後にも、渋谷あたりで会えないかというのだ。

「はあ、結構ですよ」

どんな用かといぶかりながら、

「では、ご都合のよろしい時間と場所をおっしゃってください」

久藤武男は窓から覗くどんよりした冬空を見ながらいった。

「さようでございますか。それでは……」

と、桐子が指定したのは、忠犬ハチ公像の前にある喫茶室で、午後一時というものだった。

久藤は毎週一回、水道橋の能楽堂で開かれる能の勉強会に通っているが、実のところ年内の行事はとうに終り、冬の一日、わざわざ外出するまでもないのだが、出かけるとなれば二、三、用事がないこともない。それに、桐子が会おうというのだ。外出が煩しくなっている近頃、こんな

ことでもないかぎり、師走のあわただしい雑踏に出て行く気など起こらないに違いない。

約束の時間に出かけて行くと、すでに桐子は席についていた。

「わざわざお呼びたてしまして……」

桐子は小腰をかかめ、久藤を迎えた。着物は木綿地の縞柄が好きというだけに、彼女の着つけはちょっと粋筋にみえないこともない。それを引きしめているのは、彼女の放つ雰囲気だろう。京都女の芯の強さが顔やからだに表われていて、それが一層、彼女を若々しくみせているのかもしれない。

喫茶室は暖房と人いきれで、ムツとするほどの暑さだ。久藤はオーバーと衿巻をはずし、腰をおろした。

「さすがに、大変な人出ですな」

窓から見える広場は、忠犬ハチ公像をとり巻き、凄人混みだ。

「学校は冬休みに入りましたし、クリスマススイブもそろそろですし、何かと気ぜわしいですね」

「そういえば、明後日^{あさって}がイブか……」

といったものの、一人暮らしの久藤にはクリスマススイブも大晦日も、ふだんと大して変わりはない。どうせ三人の子供たちは、自分の家族のことで手が一杯。老いた父のことまで気が回らないに違いない。

「それで、今日はまた急に、なんですか」

「そうそう……」

桐子は華やかな笑顔をみせ、

「実は今夜、わたくしどもにお客さまが大勢見えるんだそうで……。それで娘に頼まれて、昨日から、お野菜やエビなどを炊きましてね。で、先日、ホラ、久藤さんがたまには京風の総菜が食べたいと、そんなことをチラとおっしゃいましたでしょう、それで……」

少し余分に作ってみたと桐子はいった。

「ほう……」

たちまち久藤の顔がほころんだ。

「京風の煮物か……。それはなつかしいなあ……」

「でございましょう」

桐子は皺ばんだ口もとをすぼめ、ホホ……と笑い、かたわらの包みに手をかけた。

「お口に合いますかどうか……。それにこちらでは本場もんの材料が手に入りしまへんしねえ。

お醤油もじゃこも昆布も、和三盆も、ちいっと、味がしまりまへんので、なんやこう、氣イの抜けたビールみたいで……」

桐子は急に饒舌になり、包みの紐を解きにかかった。

歳のわりにはしみの少ない桐子の、白くふっくらした手の動きを久藤はみつめた。桐子を見ると、京都の女学校時代、妻の治美と彼女が机を並べていたなど、嘘かと思える。治美は桐子と違って、化粧や着物には関心がなく、暇さえあれば庭いじりをしているような女だった。

久藤は妻の荒れた手を思い浮かべながら、同じ京都の水で、同じ青春時代をすごした二人がど

うしてこうも違うのか、ぼんやり、その理由を考えていた。

「治美さんのように上手には炊けませんけど……」

不意に、目の前に小さな風呂敷包みを差し出され、久藤はびっくりしたように顔を上げた。

「お口に合いませんでしたら、ほかってください」

そういつて、桐子は細い眼を一層細くして笑った。

まだ買物があるという桐子と別れ、久藤は帰宅を急いだ。せっかくの桐子の好意だ、味がこわれたり、厭なにおいが移ったりしないうちに、京都の味をじっくり愉しみたかった。

久藤は東京育ちだが、治美と暮らしているうちに、すっかり京風の味に馴染んでしまい、今でははんなりしたあの炊きものに、郷愁を覚えるほどだった。

家に戻って、炬燵こたての上で包みを解くと、小さな重箱が一段入っていた。黒い漆もなめらかな蓋を開けると、中には炊き合わせが色よく納まっていた。

にんじん、ごぼう、えび芋、ふき……。

箸をとるのももどかしく、久藤は高野豆腐の一切れを指でつまんだ。

歯をあてると、舌に拡がる汁の冷たさ。このほどよい香りはどんこだろうか。治美の味と較べると、桐子のは、淡いなりにもコクがある。いいだしをたっぷり使っているに違いない。高野豆腐の歯にきしる感触も、なかなかの仕上りだ。

つぎのに手を出しかけて、久藤はハッとした。

煮物に氣をとられ、妻の遺影に声をかけるのをすっかり忘れていたのだ。久藤は頭を掻きながら、急いで仏壇の前に膝をついた。

線香を一本ともし、久藤は治美の写真をしみじみと見た。妻の遺影は十三年も前のものだが、それでも現在の^{いま}桐子の方が若々しいと、思わず胸の中で呟いていた。

桐子は、妻の女学校時代の級友で、久藤も以前から彼女のことは聞いていたが、会ったのは今年の夏がはじめてだった。

久藤の家は、新幹線新横浜駅から歩いて二十分。あるいは東急東横線の菊名駅からなら三十分はかかるという、辺鄙な住宅地にあった。近くに商店街も学校もなく、生活に不便だからと、息子も娘も同居をいやがり、久藤はここ数年、一人暮らしだ。

そんな侘^わび住まいを、どうやって探しあてたか、突然、桐子が訪ねてきた。

桐子は治美の仏前に掌^てを合わせ、それからあらためて久藤の前に向き直った。

治美が死んだあとも、彼女とは季節ごとの挨拶状を交わしていたので、はじめから亡妻の思い出につながる人という親しみは覚えていた。

そして桐子も初対面の堅苦しさなど少しも見せず、久藤の淹^いれた茶をゆっくりすすり、あれこれ、治美の若い頃の話久藤に語った。久藤の方も昨年、十三回忌をすませたこと、治美が死んだ時のようすなど、ぼつりぼつりと彼女に聞かせた。

「やはり、こんな台風一過の日射しの強い、暑い日でした。治美は土いじりが好きでしてね。庭

にナスやトマト、きゅうりといった小さな菜園を作ったり、水槽のような温室でシュンランやエビネやサギソウを育てたり。一日中、朝早くから日没まで、庭に出てばかりいました」

あの年は梅雨が長引き、そして急に暑くなった。そのため温室の底や植込みに蛭蟪なみぐいが異様に発生し、治美は暇さえあれば割箸と塩の入ったバケツを手に、地面を這うようにして蛭蟪を追っていた。

「脳溢血です。植込みのかげに倒れていたの、隣の人も気づかなかったそうです。夕方、下の息子が帰ってきて……」

そこで久藤は声をつまらせた。

家を買った時の借金は、生活を切りつめてきただけに、ほとんど済んでいた。妻のそうした長い苦勞に報いるために、停年退職したら、のんびり旅行しようと、治美とよく話し合っていたものだ。

その停年を一月後にひかえての治美の急死——。悔やんでも悔やみきれない苦い思いが、今でも久藤の胸をしめつける。しかも、誰にも看とられずに死んだ治美の無残な姿——。

治美の海老のように丸まった背中や手足はすでに硬直がはじまっていて、納棺には手間どった。それより何より辛かったのが、治美のからだを淨めた時だ。

長い間の土いじりで変形し、ひび割れ、土垢の染みた黒い指先。子供のように日に灼けた顔や手。そして雪のように白い胸や腹を、久藤は静かに拭いた。三十年の結婚生活で、これほど妻を身近に感じたことはないかもしれない。なかった。

髪にぬるい湯をかけ、櫛で梳いた時、白い物がからまった。久藤は静かに梳き寄せ、それをつまもうと目をこらした。すると、白い物はむくりと動いた。あの不気味さ！ 背筋を這った悪寒！ それは蛭蟪だった。しかも一匹だけではなかった。治美の髪を梳き分けると、大きいやら小さいのやら、十匹あまりが埋まっていたのだ。

さまざまな悔いや慚愧に胸を掻きむしられていたさなかだ。妻の命を奪った虫ケラが、その亡骸までも凌辱するとは……！

久藤は狂ったように泣き叫んだ。治美の髪を櫛で掻いた。それでも髪の本もとや皮膚の下、そこに潜んでいそうで、治美の髪を引きむしらずにはいらなかった。

あの時のおどましさ。蛭蟪を目にした瞬間の恐怖を、久藤はいまだに忘れることができない。「治美さんといえば、忘れられないのが、あのみごとな髪の本ですわ」

桐子が妻の髪のことを口にしたので、久藤は顔を曇らせた。だが桐子は久藤の変化に気づかないのか、話をつづけた。

「黒くて艶があつて、太くて、量もありましたでしょう。自毛で髷が結えるのが何よりのご自慢でしてね。それがまたよく似合うんですもの、うらやましかったですものですよ」

だがそれは若い頃のこと、長男が生まれてからは手がかかるというて、髪を短く切ってしまった。再び伸ばしはじめたのは五十近くになってからだ。髪に勢いがあるうちに、もう一度日本髪を結いたいというのが口癖だった。しかし、それも叶わぬうちに治美は逝った。

「治美さんが亡くなったとうかがった時、ちょうどわたくし、腎炎で入院してましたんですよ。」

退院しても、とても一人で東京まで来られるからだではありませんのでね。それでまた一層いらして……」

女にとって五十歳というのは、人生の大きな区切りなのかもしれないと桐子はいった。

そして、死んだ級友の名前をいくつか挙げ、

「でもわたくしみたいな女が、なぜ長生きするのでしょうか」と寂しく笑った。

そういえば以前、治美から聞いた話では、桐子は女学校卒業と同時に結婚し、一女をもうけた。だが破局も早く来て、三十前には夫と別居。それでも離婚にはついに同意せず、女手一つで娘を育てたということだ。

ところでこの春、桐子の娘夫婦が東京に転勤になり、彼女も一緒についてきた。

「どうしてもお線香を上げたくて、こんなふうに押しかけてまいりましたが、でも、これでやっと、肩の荷がおりました」

そういつて、桐子は仏壇の治美の遺影をじっとみつめた。

平凡な家庭の主婦として、わずか五十歳で人生を終えた女と、遮二無二、一人で生きてきて、六十をすぎた女と、はたしてどちらが幸せだろう。妻の遺影と、桐子のうつろな横顔を見やりながら、久藤は、女の一生とは何なのか、あらためて考えずにはいられなかった。

「それで、ご主人は……？」その横顔に久藤はさりげなくきいた。

「亡くなりました。七、八年になるでしょう。式には娘を出しましたけれど……」自分は出なかったというように、桐子は小さく首を振った。つかの間、桐子が見せた厳しい視線。この夫婦